
結婚症候群！　にっ！

ヒタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚症候群！ につ！

【ZPDF】

Z6073V

【作者名】

ヒタク

【あらすじ】

結婚症候群。通称マリー・シンデローム。

この病気は女性ならば誰にでも発症する可能性のあるものであり、発症すると激しい心臓の動悸。急激なめまい。居ても立っても居られない何か義務感のようなものを感じる。

そしてこの病気の何といつても一番恐ろしいこと。それは病気を発症してから最初に見た異性と結婚しないと死んでしまうということだ

この作品はかなり前に投稿したものとの続編となります。
もしも少しでも興味を持つていただけたら、もう一つの方も読ん
でもらえると嬉しいです。

「どうやら俺の部屋の突然の模様替えはマリーの仕業だつたりしこ。部屋についてマリーに聞くと恥ずかしがりながら答えてくれた。何でも、一緒に暮らすからには最低限の物を用意したことだ。

俺にはそのマリーの言う最低限の基準がいまいちわからないのだが、とにかくすさまじく高いことだけは 何せ、周りの家具が高そうだし 分かった。

また、俺の愛しい恋人 蔵書または漫画 についても聞いてのだが、マリーは不思議そうな顔をして言つたものだ。

「へ？ あんなのが必要だつたんですか？」

全く、一体どうした生活をしてきたんだ。
マリーから話を聞いていふうちに分かつたのだが、彼女は全く漫画を読まないらしい。

代わりに小説をよく読むのだといふ。

俺はマリーの言つ小説の、何といつたか……。ああ、少し思い出した。銀河鉄道……、何だつたかな。近くの喫茶店か何かがつながつていたか？ まあ、そんなことはどうだつていい。とにかく今一番言いたいことは、だ。

「俺の、俺の愛しこマイスウェイードバー達を捨てたといつのか！」

？」

この言葉に刃をきる。俺が絶望に打ちひしがれ、わなわなと震えていた、マリーもまた肩を震わせている。おお、俺の気持がわかつてくれたのか。

「ハニーハー一体誰のことですか！　私以外に妻がいるんですか！？」

？」

……全く分かつていなかつたようだ。
俺の心は海よりも高く、山よりも深く彼女らに捧げられているのだ。
……何か違つ氣がするが。

「聞いていますか！？」

いやいや、聞いているさ。聞いていて無視をしているんだ。
俺は心の中でちょっとだけ反抗するのだが、痛い。心などではな
くて身体が痛い。マリー、そんなに俺のことを蹴らないでくれ。君
は本当に心の中を読めるところのか。

「口に出して言つておきながら何を言つてているんです！」

うーん、ちょっと重しよう。

俺はいい加減にベッドの上から起きあがることにした。
気付くと時間はもう学校に行かないと間に合わなくなってしまい
そうな時間だった。

やばい！　俺は普通の高校生だ。遅刻などは基本的にしない程度
に真面目なんだ。

俺は服と鞄を取り、急いで部屋を出る。

後ろでマリーが何か言つているのが聞こえたが、今は気にするま
い。

急いで食事をしてすぐに学校へ向かわなくては。

俺は洗面所へ行き、着替えをさつと済ませる。そして親が朝に弱
いために用意されている菓子パンを朝ごはんとして口に詰め込み、

水を一杯飲みほして学校へ向かった。

後で親に聞かなくては。勝手に部屋を模様替えしたマリーのことを考え、きっと親が許可したに違いないと判断した俺はそう決心をし、学校へ向かう。

俺の高校は家から走つて大体五分前後の距離にある。

実に近い。正直、この近さのためにこの高校へ入ったのかと言わ
れても間違いではない。

俺はそのかなり近い距離をいつも以上の速さで走つたためかいつ
もの時間より若干早く着いてしまつた。

さすが俺だ。

俺は自画自賛をしながら教室へ向かう。

俺の友人は今日も元気かな、などと予想外な出来事が朝にあつた
ためか、普段では絶対に考えないようなことを考えつつ、扉を開く。

その思考がいけなかつたのだろうか。

教室で出迎えた友人だつた彼の姿を見た。そう、見てしまつたの
だ。そしてそれは俺に理解することができず、頭に浮かんだ言葉は
ただこうだつた。

教室の教卓の上に『しゃぢゆ』がいる。

一瞬、何が起きているのか全くわからなかつた。

その友人だつた こいつが友人だつたなんて現実、俺は認めない
彼は腹を教卓の上に乗せていた。もつその時点でおかしい
が、ここまでことは別にいいとしておいつ。

そして足を後ろへ伸ばし、その見事な背筋によつて足を釣り上げ
ていた。

そう、まさしく『しゃぢほ』のつに。なお、手は背中にまわ
して組んでいた。

周りにいるクラスメイトは友人を遠巻きに見ながら何かこそこそ
と話している。

どうせならこの友人に向かつて話してくれればいいのに。端的に
アホだろお前、と。

俺は心中で愚痴りながら未だに前衛芸術のような姿を取り続け
る故友人 僕的に友人として死んだ者という意味 の大沢隼彦
に話しかけることにした。

「おい、隼彦」

「なんだ?」

隼彦は未だに恰好を維持しながらこちらを向く。

その格好にいささか笑いそうになりながらも、俺は自身の忍耐力
で乗り切つた。

「い、一体な、何をしているんだ。ふつ」

隼彦の芸術は少しばかり俺の忍耐力を超えてしまった。

「このポーズはだな 」

「そのポーズは一体何だつていうんだ」

もつたいぶる隼彦に俺は追従しながら問いかける。

「俺の花を呼んでくるのヤー！」

隼彦は歯をキラッと光らせながら言ひ。無論、ポーズは維持したままで。

「な、何を言つてこるんだよ！」

俺が訳も分からず聞いてしまったのも無理はないだらつ。この男の言動は本当に意味がわからないのだから。

「ああ……。何といふことだ！ お前にはこの詩的な俺の素晴らしい表現が理解できないとでもいつのかー！」

「むしろ、理解もしたくないけどな」

俺の言葉に隼彦は分かつていらないなどばかりに首を振る。全く変なポーズをとりながら器用な男だ。

だが、さすがにこのポーズをとり続けることに疲れてきたのかようやく『しゃちほこ』をやめ、教卓の上から降りた。

「俺は毒針を持つ蜂だ」

「というよりもむしろ毒針そのもののような氣もするが。害悪しか『えない』といふ意味で」

俺は即座に言葉を返す。お前があの可愛らしげ蜜蜂のよつな蜂などといふこと、俺は認めないぞ！

「だからこそ俺が蜜を吸う、つまりは恋人として寄りそう相手は花

とこりわけだ！」

「さつきの俺の言葉は無視か！ それにお前が寄りそつとか氣色が悪いわー！」

隼彦の言葉は全く理解できなかつた。

いや、むしろ頭が理解するのを拒んでいるような感じか。

「……あれ？ だがそういうさつきのポーズは一体何なんだよ？」

仕方なく隼彦の言葉を頭の中に聞きこれた俺だが、その言葉とさつきのポーズに全くの関連性がないことに気がついた。

「あ？ あれはただネットで調べたら恋人ができるポーズとして載つていたんだ。だからやってみただけだ」

「さつきまでの蜂とかの話、全部関係ないのかよー？」

俺の言葉に頷く隼彦。全く馬鹿もいゝ加減にしてほしこものだ。

「やつひづ賢治は彼女欲しくないのかよ」

隼彦はお前も同じ穴のむじなだらう、とでも言こたげな顔だ。

「俺は……」

答えよつとして朝の光景を思い出した。

マリー。あんな美少女が俺の妻になるなんて言つていた。

結婚症候群。それは望んでいなかつたとしても結婚しなければ死んでしまう病気。

マリーは望んでいなけど死にたくないからあんなことを言ったんじゅ……。

俺はそう言つた気持ちが拭えず、隼彦の言葉に答えられなかつた。

「まあ、分かりきつていることだよなー」

笑つて俺の背中を叩いてくる隼彦は俺に考えをせむることをせなかつた

「お前はあんなに一次元が好きだからなー！」

「一次元じゃねえ！ ただの漫画だ！」

なにせこんな言葉を吐くのだから。

あれ？ 俺もおかしかつたりするのか。

周りのクラスメイトの反応を見て、一抹の不安を感じる俺であつた。

「今日は、転校生を紹介するぞ！」

ガヤガヤと騒いでいたクラスにようやく到着したバー코드先生
頭的な意味で がうるさい生徒達に向かつて叫んだ。

みんな現金なもので今まで騒いでいたというのにすぐに黙る。
バー코드先生はそのみんなが黙つたことに満足したのか、うん
うんと残り少ない髪を上下に揺らしながら頷く。

「先生！ バー코드先生！ 来るのは女子ですか？」

転校生にもう興味津々な男、隼彦が声を上げる。

「誰が、バー코드だ！ 隼彦、お前のような失礼な奴には教えん
！」

「そんな！？ すみません、言い方を改めますから！ ですから、教えてください 」

さすがに隼彦も転校生のことを知るためなら下手に出るよつだな。俺は隼彦の処世術にちょっとばかし感心し、頷くと、

「 ハゲ先生！」

「 なお悪いわ！ 直球すぎるんだよ、お前は！」

隼彦の頭を殴つた。

「 いつてえ！ 何すんだよ、賢治！」

「 お前はアホか！ バーコード先生はな、残り少ない、文字通り数少ない髪いのちを大切にしているお方なんだぞ！ それなのに露骨に言つなんて失礼すぎるだろ！ ハゲ先生に謝れ！」

俺はハゲ先生を指さして隼彦を注意する。全く、隼彦もハゲ先生を気遣つてあげてほしいものだ。ハゲ先生がかわいそうじやないか。 「そ、そ、うか……！ ハゲ先生、すみませんでした！ これからはハゲ先生のことをハゲ先生なんて馬鹿にするように言わずにきちんとバーコード先生と呼びます！」

隼彦は俺の説得が分かつてくれたようだ。俺はそのことを喜ばしく思い、自然と笑つてしまつ。隼彦も笑つていた。気づけばハゲ先生も俺の方を見て嬉しそうな顔をしている。 やつぱり、気を使われて嬉しいんだろうな。

俺は自分のした慈愛に満ちた行動を振り返り、満足する。

そんな中、笑っていたハゲ先生は急に笑顔を般若のよつて怒りの表情へと変える。

「 お前ら！ 廊下に立つてろー。」

そして、俺たちへ向かってしかりつけたのだった。
俺と隼彦がハゲ先生の理不尽な言葉に心底不思議だと頭を傾げながら、廊下に出て行くのをクラスメイトが笑つて見送つていた。

少女が歩く。いつもは無機質な廊下が生きているかのようにざわめき立つ。

少女が外を見る。いつもは無気力な生徒がだらだらと走っていたりする場所には鬼気迫るかのように競争し出す男で溢れる。少女が俺を見る。少女はその顔を破顔させ、大きく俺に飛びついた。

「 賢治さん！ 会いたかったですー！」

まあ、言つまでもないかもしけないが、マリーであつた。

「はー？ なんだここのいるんだよー？」

あれ？ そういうえば、マリーって学校に通つているのか？
言つてから疑問に思つ俺にマリーが答えた。

「 私のお父さんがお願いしたんですー。」

それはものすごい笑顔だった。その綺麗な笑顔に見惚れた俺は思わず、ノックアウトされそうになつて

「 ここに入ってくれないと学校を潰すつて！

「なんだよ、それー? やうにとまつてこなさー、あれがじつあんねんだけどー?」

ある意味ノッケアウトされた

「そうですか？」

マリーは本当に不思議そうな顔をして可愛らしく首を傾げる。
お、恐ろしい……！ でも当たり前ともいつかのよつて言える
ほど日常染みてこるとでもいうのか……！？

俺がマリーの言葉に戦慄させられていると、いきなり何かが俺とマリーの間に現れた。

「さあ、君の名前は何て書つんだー!?

隼彦だつた。

隼彦は又二つの手を握りながら聞く。

それに驚いて俺が目を丸くしていると俺の様子に気がついたのか
マリーマアは、と苦笑をしながら隼彦に返事をした。

「私の名前はマリエル＝ベルトランです。是非とも私のことはマリーなどといった愛称では呼ばないでくださいね、下種なお方」

かなり言葉にはとげがあつた。

やつぱり隼彦がいきなり手を掴んだことが気に入らなかつたんだ

俺が頷いていると隼彦がふるふると震えだした。

さすがにマリーの言葉は気に入らなかつたのか、なんて至極もつともなことを俺が考えていると、

「やつぱつ、俺と君はお似合いだ！ 是非とも俺と付き合ってください。」

セーーー

……一本じこお似合いな要素があつたといつんだ。

俺は呆れてしまつた。さすがにこんな男とマリーが付き合つて二うのはあり得ないし、気に食わない。例え、無理やり俺と結婚させられそうになつてゐるとはこえ、せこ、だからこそ俺はマリーに俺なんかよりも、もつといい男と結婚してほしこと思う。……結婚とは一度してしまえば後は離婚して再婚することも可能なのだから。

「おい、隼彦いい加減にし

「地に落ちなさい、下郎」

ツーーい、今の言葉はマ、マリーか！？

俺は驚いてマリーの方を見た。

マリーは涼しげな顔をして、先ほどの言葉を言つたよつこはまるで見えない。

「い、いくらけなしてくれても構いません！ だから、だから俺と付き合つてください！」

「何と言われても私はごみ屑なんかとは付き合つません！ 何しろ、私は身も心も賢治さんに捧げているのですからー！」

言つてからマリーのやうですよね、とでも言つたげな顔が俺に向けられる。

隣で見てこいる隼彦の顔から俺に対する憎々しさがこじみ出ている。そして、隼彦の手には 薦人形と釘と金槌。

「つておーー その禍々しい道具の数々を一体どうするつもりだよー？ いや、それよりも一体どこからそんなものを出したんだよー！」

?

隼彦は藁人形に釘をさす。そして、金槌を釘に向けて振り上げた
か
　と思ったがそんなことはなかつた。

「関係ないのなら俺に刺そつとするなああああああああ」

俺に向けて隼彦は釘を刺そうとしてくる。俺は必死になつて隼彦の釘から逃げる。

そんな俺達の行動をマリーは微笑ましい物を見るかのように何も言わずに笑っていた。

「うるせーんだよ、お前ら！ 廊下に立ってるんだから、しおりこへしてこいー。そして、しつかりと反省しやがれー！」

さすがに俺達の声がうるさくて教室にまで聞こえていたらしい。これは謝らないとまずいな、と俺が思っていると隼彦もどうやらまずいとは思つているらしい。手に持つた凶器を床に置く。そして、俺達は一人合わせて謝つた。

「すみませんでした、ハゲ先生！」

その声にハゲ先生は震え始める。

し、しまった！ わざわざ言われたばかりじゃないか！

俺はそのことを思い出した。見ると隼彦も思い出したみたいで俺と顔を見合させる。

（お、お前も思い出したか）

（ああ、思い出したさ）

俺達はアイコンタクトを取り、そのことを確認しあう。

それから、また二人して謝ったんだ。

「「すみませんでした！ ハゲ先生じゃなくてバーコード先生！」

結果として俺達には昔ながらの水入りバケツが両手に装備せられることが決定したのだった。

(後書き)

意見・感想・誤字報告ありましたら教えてくださいると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6073v/>

結婚症候群！ にっ！

2011年8月20日15時07分発行